故郷(6)

魯迅
竹内好 訳

(ルントウと再会した数日後、「私」たちは故郷から旅立ちました。)

船はひたすら前進した。両岸の緑の山々は、たそがれの中で薄墨色に変わり、次々と船尾に消えた。

私といっしょに窓辺にもたれて、暮れてゆく外の景色を眺めていたホンルが、ふと問いかけた。

「伯父さん、僕たち、いつ帰ってくるの。」

「帰ってくる？　どうしてまた、行きもしないうちに、帰るなんて考えたんだい。」

「だって、シュイションが僕に、家へ遊びに来いって。」

大きな黒い目をみはって、彼はじっと考え込んでいた。

私も、私の母も、はっと胸をつかれた。(中略)

古い家はますます遠くなり、故郷の山や水もますます遠くなる。だが名残惜しい気はしない。自分の周りに目に見えぬ高い壁があって、その中に自分だけ取り残されたように、気がめいるだけである。すいか畑の銀の首輪の小英雄の面影は、元は鮮明このうえなかったのが、今では急にぼんやりしてしまった。これもたまらなく悲しい。

母とホンルとは寝入った。

私も横になって、船の底に水のぶつかる音を聞きながら、今、自分は、自分の道を歩いているとわかった。思えば私とルントウとの距離は全く遠くなったが、若い世代は今でも心が通い合い、現にホンルはシュイションのことを慕っている。せめて彼らだけは、私と違って、互いに隔絶することのないように……とはいっても、彼らが一つ心でいたいがために、私のように、むだの積み重ねで魂をすり減らす生活を共にすることは願わない。また、ルントウのように、打ちひしがれて心が麻痺する生活を共にすることも願わない。また、他の人のように、やけを起こして野放図に走る生活を共にすることも願わない。希望をいえば、彼らは新しい生活をもたなくてはならない。①私たちの経験しなかった新しい生活を。

希望という考えが浮かんだので、②私はどきっとした。たしかルントウが香炉と燭台を所望したとき、私は、相変わらずの偶像崇拝だな、いつになったら忘れるつもりかと、心ひそかに彼のことを笑ったものだが、今私のいう希望も、やはり手製の偶像にすぎぬのではないか。ただ、彼の望むものはすぐ手に入り、私の望むものは手に入りにくいだけだ。

まどろみかけた私の目に、海辺の広い緑の砂地が浮かんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月が懸かっている。思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは③地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

時代背景

『故郷』では古い時代の風習が象徴的に登場し、語り手の「私」を通して社会に対する批判や新しい時代への希望が訴えられている。ここには、作品が発表された当時の社会に対する魯迅の思いが反映されている。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「私たちの経験しなかった新しい生活」とあるが、これに対して、「私」の世代が経験した生活を、本文中から十五字以上二十字以内で三つ探し、それぞれ最初の三字を答えなさい。

(2) ——線②「私はどきっとした」とあるが、「私」は何に気付いてこのように感じたのか。適当なものを選びなさい。

ア 私が思う希望というものは、地上の道のようなものではないかということ。
イ ルントウが香炉と燭台で偶像崇拝をするのを、心の中でひそかに笑っていたこと。
ウ 若い世代に新しい生活を望むのは、偶像崇拝と変わらないのではないかということ。
エ 私よりルントウが望むもののほうがすぐに手に入るので、笑うのはおかしいということ。

〔　〕

(3) ——線③「地上の道のようなものである」とあるが、これはどういうことを表しているか。最も適当なものを選びなさい。

ア もともと地上には道がないように、実際には存在しないものだということ。
イ 歩くときは道に沿って歩くように、最初からそこにあるものだということ。
ウ 同じ願いのもとに進む人が増えれば、確かなものになるのだということ。
エ 具体的な道筋を示さなければ、行動する人は増えないのだということ。

〔　〕